

437 新しい腎イメージング剤 ^{99m}Tc -dimercapto-propionic acid(DMP) の臨床的評価

倉内洋文, 町田豊平, 大石幸彦, 柳沢宗利, 田中 彰, 島田 作(慈大 泌), 村田 啓(虎の門 核)

合成の簡易化, 被曝線量の軽減などを目的に, 各種腎イメージング剤の開発, 検討を行い報告してきた。第21, 23回の本学会ではわれわれが開発した腎イメージング剤 ^{99m}Tc -Dimercapto-propionic acid(DMP) の有用性について, 主として基礎的検討を行い報告した。

今回, 臨床例に ^{99m}Tc -DMPによる腎イメージングを行い臨床検討を行った結果を報告する。

対象は正常例5例, 各種泌尿器科疾患50例, 計55症例である。

^{99m}Tc -DMP 2-5mCiを経静脈的にbolus 静注し, 血管相イメージ, 機能相イメージを撮影した。機能相イメージは静注2-3時間後に撮影した。

^{99m}Tc -DMPによる腎イメージは ^{99m}Tc -DMSA イメージと比較し肝集積の高い傾向を認めたが, 正常例では良好な腎イメージが得られ, また, 高度腎機能障害例でもほぼ満足すべき腎イメージを得る事ができた。

^{99m}Tc -DMPは腎イメージング剤として臨床応用可能であると考えられる。

438 ^{99m}Tc -MDPによる腎機能検査

尾形優子, 菱沼誠, 照井 瑠(仙台厚生病院) 吉岡清郎, 松沢大樹

佐藤多智雄(東北大抗研) 腎シンチグラフィに使用する ^{99m}Tc -MDPは, 体内の燐酸代謝に基づき, 骨に集積するとともに腎からの排泄を受ける為, 腎シンチグラムにおける腎の描出は, 腎に関する情報を与え得る。当病院では, 悪性腫瘍の骨転移の検査及び治療効果の判定を目的とする腎シンチを年間約400例施行している。化学療法施行中の患者では, 抗癌剤による何らかの腎障害をみることが多い。文献的にMDPとDTPAとの相関から, 腎シンチの依頼時に化学療法を施行している患者を対象に, ^{99m}Tc -MDP投与時, γカメラレノグラフィを試み, 約60例の症例を経験している。化学療法施行の患者では薬剤による腎機能低下を反映していると思われるレノグラムが認められ経時変化の観察にも有効だった。腎機能検査にMDPレノは有用な手法だ。

439 各種副腎腫瘍における副腎スキャンの検討

吉越富久夫, 町田豊平, 大石幸彦, 上田正山, 木戸 晃, 田代和也, 鳥居伸一郎, 吉田 希(慈大 泌)

副腎腫瘍の局在診断は手術のさい特に重要である。我々は各種副腎腫瘍における副腎スキャンの局在診断の有用性について検討した。

対象は手術を施行し得た副腎腫瘍34例で, 原発性アルドステロン症16例, Cushing 症候群7例, 褐色細胞腫9例(うちSipple 症候群2例), 神経節神経腫1例, 副腎癌1例であった。

原発性アルドステロン症およびCushing 症候群の全例, 褐色細胞腫7例, その他の2例に ^{131}I -Adosterol による副腎スキャンを, Sipple 症候群2例に ^{131}I -MIBG による副腎スキャンを施行した。

^{131}I -Adosterol による副腎スキャンを施行した32例中24例で局在診断が可能であった。原発性アルドステロン症6例, Cushing 症候群, 褐色細胞腫, 神経節神経腫, 副腎癌各1例で局在診断が不可能であり, 原発性アルドステロン症の6例中2例は抑制スキャンでも不可能で, 4例は抑制スキャンを施行し得なかった。 ^{131}I -MIBGによる副腎スキャンを施行したSipple 症候群2例中1例で局在診断が可能であった。

440 SPECTによる副腎I-131-アドステロール摂取率に関する検討。片側副腎描出例における臨床的意義

石村順治, 末廣美津子, 立花敬三, 福地 稔(兵庫医大 核, RI)

我々はSPECTによる副腎アドステロール摂取率測定の臨床的有用性につき, 本総会等で報告した。今回は, 片側副腎描出例が必ずしも副腎皮質機能亢進によるとは限らない事に着目し, かかる症例における副腎アドステロール摂取率測定の意味につき検討した。

対象は片側副腎描出例12症例で, 内訳は副腎腺腫2例, 副腎皮質過形成を伴う褐色細胞腫1例, 反対側副腎摘出症5例, 原発性および転移性副腎癌3例, その他1例である。方法はすでに報告したスタンダード法によった。

片側副腎描出例における副腎アドステロール摂取率は0.3%から3.1%に分布する成績が得られた。これを副腎皮質機能別でみると, 副腎腺腫および褐色細胞腫の機能亢進例では1.1%から3.1%の範囲を示し, 平均 $1.97 \pm 0.84\%$ であった。これに対し機能亢進によらない片側描出例では0.3%から1.0%の範囲を示し, 平均 $0.64 \pm 0.28\%$ であった。以上の成績から, かかる症例での本法の有用性が確認出来た。